平成 24 年度　霧多布湿原学術研究助成事業

浜中町における
オオセグロカモメ *Larus schistisagus*
及び
ウミウ *Phalacrocorax carbo*
の営巣数調査

特定非営利活動法人エトピリカ基金

浜中町におけるオオセグロカモメ及びウミウの営巣数調査

特定非営利活動法人エトピリカ基金

片岡義廣

目的

太平洋に面している浜中町は、沖合を流れる親潮がもたらす高い生物生産力により、水産物などの海の幸に恵まれ、豊かな海洋生態系を享受する地域としても日本有数であると誇れるだろう。当 NPO の名称に含まれ、かつ浜中町の鳥であるエトピリカは、その豊かな海の幸及び海洋生態系のシンボルでもある。

しかしながら、エトピリカだけではなく、豊かな海の幸のシンボルとなる海鳥類は、他にも多数存在し、特にオオセグロカモメ（*Larus schistisagus*）とウミウ（*Phalacrocorax Capillatus*）の繁殖地は、町内に数多くあると考えられている。これらの種に関しては、海岸域で普通に見られることから、エトピリカに較べて町民にとっては身近な存在ではあるが、世界的にみると分布の非常に限られた種（注１）である。また、オオセグロカモメについては、北海道道東部域が日本での繁殖分布の中心であるが、過去 20 年間に、その生息数が激減しているといわれている。激減の原因としては、天敵であるオジロワシの増加及び餌となる魚や人間の出す廃棄物の減少があげられるが、はっきりとしたことは判明していない。さらには、生息数・繁殖数の調査も、普通種ゆえに少なく、浜中町での数の推移については、情報不足である。日本国内においては普通種にランク付けされているものの、世界的な分布が狭く、生息数が激減している海鳥類が、現在、どれくらい浜中町で営巣しているかを調査し、「第二のエトピリカ」にならないように継続調査の対象候補として捉えていきたい。

注１．　オオセグロカモメは、カムチャッカからコマンドル諸島・千島・サハリン・東北地方以北の日本。ウミウは沿海州・サハリン・千島および日本でのみ局所的に繁殖し、両種ともアジア極東に特有な海鳥類と述べることが可能である。

調査期間

〇陸上：2012 年 5 月 27 日、6 月 7 日、15 日、7 月 13 日　霧多布島周辺

〇船上から沿岸：2012 年 6 月 29 日　霧多布～二つ岩・根室市境界～霧多布島北側

2012 年 7 月 11 日　霧多布～琵琶瀬高台下

同上　散布～琵琶瀬高台下～鯨浜・厚岸町境界まで

調査方法

浜中町の全海岸線を対象とし、そこにある崖・岩・島・港など営巣の可能性のある地点を、地図・航空写真等で事前に確認し、根室市境界から厚岸町境界までの町内全域の営巣数をカウントした。沿岸調査はコンブ船等の小型船を利用し、町内沿岸を三地区に分け（調査期間参照)、沿岸になるべく接近するかたちで巣の数をカウントした。岩の頂上など、船上から見えない地点にオオセグロカモメの雛がいることがあり、その場合は雛の数などから営巣数を推定した。霧多布島周辺においては海上調査と合わせ、周辺を徒歩で巡り地上から調査可能な地点の営巣数をカウントした。それぞれカウントしたものは地図上に位置を落とし営巣数を記入した。

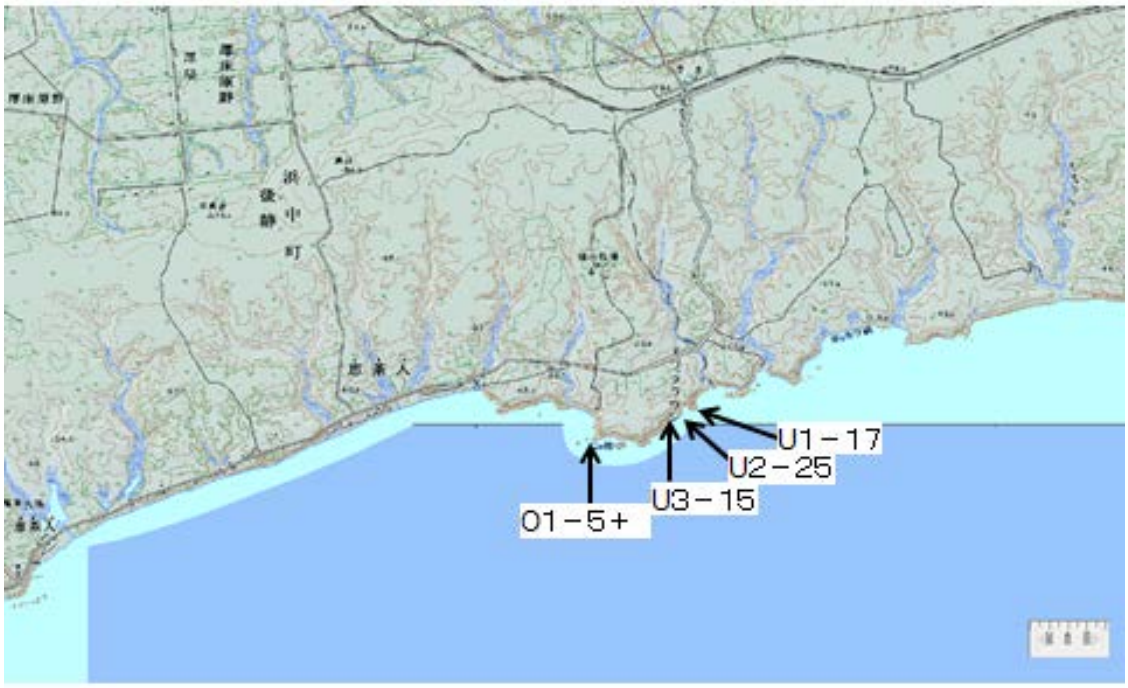
小型船からの沿岸調査

結果

今回の浜中町全域調査では、**オオセグロカモメ 377＋巣、ウミウ 571 巣、オジロワシ 4 羽**を記録した。各地域の営巣場所及び営巣数は以下のとおりである。

（　地図上の記号：　U→ウミウ　O→オオセグロカモメ　W→オジロワシ
　記号の後の数字：場所番号　　最後の数字：営巣数・オジロワシは個体数　）

浜中町北部　①（根室市境界～恵茶人）：オオセグロカモメ５＋巣
ウミウ 57 巣



Ｕ１
ウミウ 17 巣

Ｕ２
ウミウ 25 巣

Ｕ３
ウミウ 15 巣

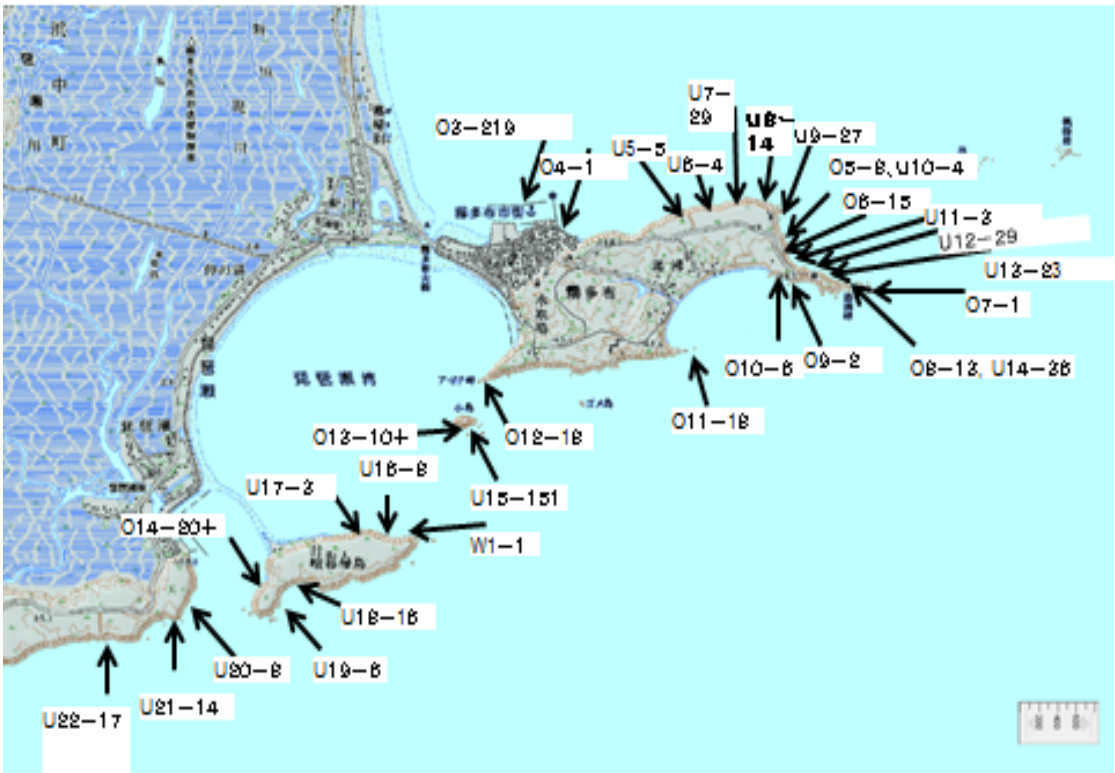
Ｏ１
オオセグロカモメ 5+巣

浜中町北部　②（恵茶人～後静）：オオセグロカモメ 38 巣　ウミウ 19 巣

Ｕ４
ウミウ 19 巣

Ｏ２（奔幌戸港、離れ堤防）
オオセグロカモメ 38 巣

浜中町中央部（霧多布港～琵琶瀬高台下）：オオセグロカモメ 331+巣
ウミウ 407 巣　オジロワシ１羽



Ｏ３（霧多布港、離れ堤防）
オオセグロカモメ 219 巣

Ｏ４（建物屋根）
オオセグロカモメ１巣

Ｕ５
ウミウ５羽

Ｕ６
ウミウ４羽

Ｕ７
ウミウ 29 羽

Ｕ８
ウミウ 14 羽

Ｕ９
ウミウ 27 巣

Ｏ５　Ｕ１０
オオセグロカモメ８巣
ウミウ４巣

Ｏ６（展望台下）
オオセグロカモメ 15 巣

Ｕ１１～Ｕ１２
ウミウ 32 巣

Ｕ１３
ウミウ 23 巣

Ｏ７（霧多布岬先の岩礁）
オオセグロカモメ１巣

Ｏ８　Ｕ１４（ピリカ岩）
オオセグロカモメ 13 巣
ウミウ 36 巣

Ｏ９～Ｏ１０
オオセグロカモメ 7 巣

Ｏ１１（一番丁の先）
オオセグロカモメ 18 巣

Ｏ１２（アゼチの岬）
オオセグロカモメ 18 羽

Ｏ１３　Ｕ１５（小島）
オオセグロカモメ 10+巣
ウミウ 151 巣

Ｕ１６～Ｕ１７
ウミウ 11 巣

Ｕ１８
ウミウ 16 巣

Ｕ１９
ウミウ６巣

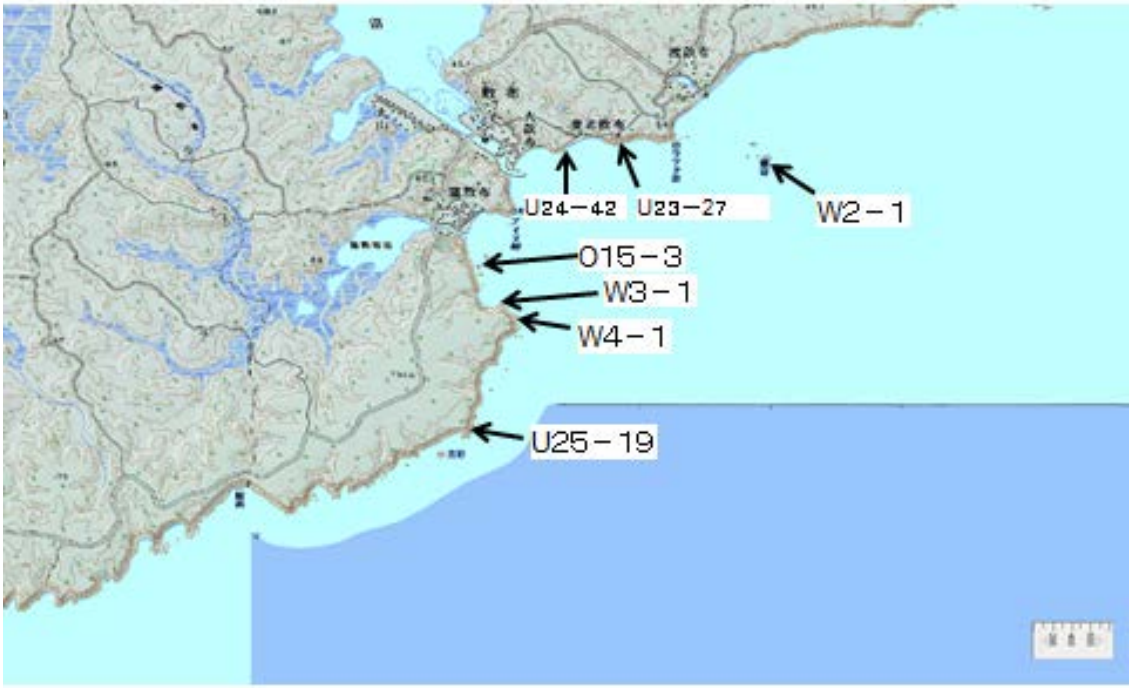
Ｏ１４
オオセグロカモメ 20+巣

Ｕ２０
ウミウ 18 巣

Ｕ２１
ウミウ 14 巣

Ｕ２２
ウミウ 17 巣

浜中町南部（琵琶瀬高台下～厚岸町境界）：オオセグロカモメ３巣
ウミウ 88 巣　オジロワシ３羽



Ｕ２３
ウミウ 27 巣

Ｕ２４
ウミウ 42 巣

Ｏ１５
オオセグロカモメ 3 巣

Ｕ２５
ウミウ 19 巣

考察

今回の調査でのオオセグロカモメの営巣数は 377＋であった。そのうちの三分の二にあたる 256 巣が、奔幌戸港と霧多布港にある離れ堤防上にあった。その他では、建物の屋根にあった１巣を除く 120＋が、島や岩礁・崖など自然環境での営巣数となり、そのほとんどは中央部の霧多布島からケンボッキ島での営巣であった。20 年前の小島上部では１ｍ～２ｍ範囲でオオセグロカモメの巣があり、数百ペアが繁殖していたと考えられ（片岡・未発表）、霧多布岬周辺の崖や岩でも、過去においては高密度での営巣が見られたが、現在では、こうした島や崖ではオジロワシがオオセグロカモメを襲って捕食するのが頻繁に見られるようになっていた。原因がそれだけかは不明であるが、自然環境でのオオセグロカモメの営巣数は近年激減していることは確かである。かわりに増加しているのが堤防上での繁殖で、人間の入り込めない離れ堤防のみに営巣していた。海面よりそれほど高くない堤防は、天敵のオジロワシが上空より襲いにくいことが考えられる。ただ堤防上の増加は自然環境の減少の一部にすぎず、全体では相当数が 20 年前に比べ減少したと考えられる。

ウミウの営巣数は全体で 571 であった。過去の調査例がないことから数の増減は不明である。最も多いのが小島の 151 巣で、全体の７割が小島を含む中央部の霧多布島から琵琶瀬高台下にあった。この地区にはウミウの営巣に適した 40ｍ程度の切り立った崖が多くあるのが一つの要因として考えられる。今回の調査でＷ－１にてオジロワシがウミウの雛を捕食しているのが観察された（写真）。オオセグロカモメが減少してから、このようなオジロワシによるウミウの捕食が観察されていることが増えたと考える。

今回の調査で、平成 24 年度のオオセグロカモメとウミウの営巣数が判明した。今後、浜中町において両種の生息状態がどう変化していくのか、継続的・定期的に調査することが必要と考える。

謝辞

本調査は霧多布湿原学術研究助成を受けて行ったものである。浜中町役場には深く感謝をいたします。また、北部・中央部の調査において船を出していただいた浜中漁業共同組合、南部の調査にてお世話になった散布漁業共同組合、船を出していただいた林肇氏にお礼を申し上げます。